(P1の続き)

日本企業及びブラジルの研究機関と診断キットを共同開発して製品化しています。COVID-19に関してもいち早く診断法を開発し、2020年3月には正式な診断法として国の承認を受けて、医療機関や検査所等で活用されてきました。

新興ウイルス感染症の多くは、アフリカ、アジア、南米の発展途上国において野生動物から人へ偶発的に伝播したものが人から人へ感染拡大し、国を越えて広がってしまったものです。したがって、特定の地域・国だけで解決できるものではなく、全世界が協力して取り組むべきグローバルな問題として捉えなければなりません。

実際に、私たちは新興感染症が発生するガボン、コンゴ民主共和国、ギニア、ナイジェリア、南アフリカ、ブラジル、タイ、ベトナムなどでの研究活動も積極的に行ってきました。現地での研究には、現地研究者との良好な関係作りが重要ですが、幸い長崎大学はこれまでアフリカやアジアなどからたくさんの留学生を受け入れており、母国に戻った卒業生が協力してくれるケースも多くあります。また、現地では子どもたちと接することもあります。彼らにとって日本人は見慣れないので最初はちょっと距離があるのですが、声をかけると抱きついてきたり腕を組んだりして、とても温かい気持ちになります。感染症流行という厳しい状況下にあっても子供たちの元気な姿は常に明るい希望です。

令和4年4月、長崎大学に高度感染症研究センターが設置され、現在は国や地域との協議を進めながらBSL-4実験施設の稼働に向けて準備を行っています。私たちは、日本がこれまで高い科学技術を有していながら、地球全体の問題である感染症、特にわが国ではほとんど患者が報告されていない致死性の高いウイルス感染症に関して十分に貢献できていなかったと感じています。治療薬やワクチンの開発研究、そして基礎研究の分野においてもしっかりと研究成果を出して世界に貢献するという責任を果たしていきたいと思います。

市民公開講座の開催

センターとなって初めての市民公開講座、「ウイルス学研究に魅せられて」（講師：浦田秀造准教授）を令和４年7月23日(土)に開催し、当日は約150名の高校生・一般の方の参加がありました。講演では、研究者を志した頃のエピソードを交え、現在の研究内容がわかりやすく解説されました。参加者は熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が行われました。最後に講師から「研究は研究者だけでできるものではなく、多くの人の理解とサポートが必要です。日本の誇りになるような研究を発信していきたいと思います」というメッセージがありました。また、講演が終了した後にも質問に高校生の長い列ができていました。

日本ウイルス学会学術集会 長崎で開催

令和4年11月13日（日）～15日（火）の３日間、第69回日本ウイルス学会学術集会（会長：森田公一長崎大学感染症研究出島特区長）が長崎市の出島メッセで開催されました。「ポストコロナ時代のウイルス学研究」というテーマのもと、ドイツ、米国、南アフリカを含む国内外から世界トップレベルの研究者が長崎に集いました。３年ぶりに対面での開催となった今回の学術集会には、高度感染症研究センターからも多数の研究者が参加しました。

「BSL-4と高病原性ウイルス研究の最前線」と題したシンポジウムでは、当センターの安田二朗教授、南保明日香教授が座長を務めました。また期間中、その他のセンター研究者や研究室に所属する大学院生もそれぞれの研究テーマで発表を行いました。

CCPID 長崎大学高度感染症研究センター National Research Center for the Control and Prevention of Infectious Diseases Nagasaki University

お問合せ先　ご意見・お問い合わせはこちらまでお気軽にご連絡ください。

長崎大学高度感染症研究センター　〒852-8523 長崎市坂本１丁目12番４号

フリーダイヤル 0120-095-819

ファックス 095-800-4301

より詳しくお知りになりたい場合は、ホームページをご覧ください。

ホームページアドレス https://www.ccpid.nagasaki-u.ac.jp